

第一七回子規忌……………事務局…一

生死の執着と安心―一遍と子規と……………三好恭治…五

湯の山文庫と和田茂樹蔵書……………小椋浩介…一五

「ホトトギス」松山から東京へ……………松浦卷夫…二二

子規と俳句作法……………平岡英…三三

〈随想〉外国の方に俳句や短歌で日本を伝えたい……………越智泰子…三七

〈速報〉佛海山西龍寺に子規句碑建立 ほか……………会誌編集部…三八

第一一七回子規忌 献詠作品……………事務局…四〇

〈短信〉〈編集後記〉……………会誌編集部…四三

子規會誌

一六〇号 平成三十年十月

例会記録

○平成三十年七月例会(第九〇六回)
七月十九日(木)愛媛新聞社本社七階会議室出席者三十八名
卓話「その日の子規庵」 歌人・会津八一と正岡子規
本会会長 烏谷 照雄

明治三十三年一人の青年が根岸の子規庵を訪ねてきた。子規と会津八一の初めての出会いである。八一にとつて子規との出会いは生涯の師たらしめ、強烈に刻々人に迫るが如き一種人格の力を強く感じた。具体的資料を提示して明快に話された。

講演「子規さんの心意気」 理事 忽那 哲

「自らに課した使命を遂げよう」という積極的「な子規の」心意気」を視点として子規の短い生涯を克明にたどりながら、文学活動と人との出会いを中心に精査された。子規の三大随筆(「墨汁一滴」「仰臥漫録」「病牀六尺」と手紙、子規の生きてゆく姿勢を、伊藤左千夫が「正岡先生論」の中で論じている「天稟の能力」「絶対的態度」詩人としての資質、態度をとりあげて、子規の最も子規らしい生き方として紹介された。

○平成三十年八月例会(第九〇七回)

八月十九日(日)愛媛新聞社一階ホール 出席者三十六名
卓話「河東家の出自について」 出席者三十六名

相模國・伊豆國・伊賀國へ備前へ伊予國まで

常任理事 高木 貞雄

河東家二十四代、坤の三男(竹村鏡)は明治二十五年大学卒業、神戸師範学校に奉職。同二十八年神戸病院に子規(日清戦争に記者として従軍、帰還後入院)を見舞い、陸羯南に病状を報告。妻モトが残した文章河東家系図を基に詳細に説明された。

講演「子規から茂吉へ」(下)

子規の継承と茂吉の短歌の世界

常任理事 山上茂次郎

子規の短歌革新(運動)の継承者として、左千夫、茂吉の流れ

を中心に読み解かれた。左千夫は子規の評価する万葉調の「叫び(言語の声化)へと高めていった。子規の「写生」短歌を継承し、根岸派雑誌「アララギ」において実践・練磨し、子規短歌の精神が確立されてゆく、その中心的な活躍が斎藤茂吉である。茂吉の代表的な短歌集、「赤光」「あらたま」「ともしび」「白き山」などを参照しながら懇切丁寧に解説をされた。

○平成三十年九月例会(第九〇八回)

九月十九日(水)正宗寺本堂 出席者四十名

講演「明治維新一五〇年―書簡から読み解く明治人の生き方」

松山子規会顧問 正岡 明

子規、周辺の人々、特に子規の叔父で、終生経済的精神的支えとなった加藤拓川を中心に論を展開された。日露戦争開戦直後、仁川港に向けて出発する瓜生外吉より拓川宛の遺書、日露戦争の勝利に貢献した明石元二郎から拓川宛の絵はがき、拓川が食道癌で死去する十日前犬養毅から「徹頭徹尾生きざる可からず」との激励。三人の書簡を通して支え合う心、濃密な人間関係、国全体が意気に燃えていた時代を熱く語られた。

例会案内(予定)

○十一月例会 平成三十年十一月十九日(月)正宗寺本堂

講演「はて知らずの記」の旅をめぐって

事務局長 渡部 平人

卓話「清水則遠は子規の中に生きていく」

相談役 今村 威

○十二月例会 平成三十年十二月十九日(水)正宗寺本堂

講演「子規俳句の俳句性」

愛媛大学准教授 青木 亮人

卓話「子規俳句に見える洋語について」

常任理事 田村 七重

○一月例会 平成三十一年一月十九日(土)東京第一ホテル

卓話「子規の正月」

常任理事 松浦 巻夫

新年懇親会 十一月三十分開始

第一一七回子規忌並びに物故会員法要

事務局

正岡子規没後第一一七回忌の子規忌並びに物故会員法要

は、新しい時代に繋げていくと共に平成最後を飾るに相応しく、平成三十年九月十九日(水)午後一時三十分より、天龍山別格正宗寺に於いて、来賓十五名、会員四十名、一般十名の計六十五名で厳かに執り行われました。

一 墓前祭(正宗寺子規埋髪塔前)

○説経 天龍山別格正宗寺住職

田中義雲 師

○会員献詠披講 松山子規会常任理事

森 愼吾

一 本法要(正宗寺本堂)

○開会挨拶 松山子規会会長

烏谷照雄

○来賓挨拶 愛媛県立松山東高等学校校長

村上敏之 様

○メッセージ 本会顧問 愛媛県知事

中村時広 様

松山市長 野志克仁 様

(代読) 松山子規会副会長

兼事務局長 渡部平人

○法要説経 天龍山別格正宗寺住職

田中義雲 師

○子規遺作朗詠 吟道明教館総本部副会長

子規会会員 武田峰松

「絶筆三句」

糸瓜咲て痰のつまりし佛かな

痰一斗糸瓜の水も間にあはず

をととひのへちまの水も取らざりき

○焼香

正岡家代表 子規の妹・律の孫 正岡 明 様

愛媛県立松山東高等学校校長 村上敏之 様

愛媛県俳句協会会長 松本勇二 様

松山市立子規記念博物館館長 竹田美喜 様

坂の上の雲ミュージアム館長 松本啓治 様

松山東雲女子大学学長 塩崎千枝子 様

庚申庵倶楽部理事長 松井 忍 様

佛海山西龍寺住職 児島一晴 様

愛媛新聞社専務取締役 柳田幸男 様

南海放送取締役専務執行役員 兵頭英夫 様

愛媛CATV会長 神山充雅 様

伊予銀行味生支店長

行本 誠 様

愛媛銀行味生支店長

山本拓二 様

大和屋本店会長

奥村武久 様

株式会社サンメディカル社長

野本政孝 様

松山子規会会長

烏谷照雄

松山子規会会員及び一般参列者

「第一一七回子規忌」でのあいさつ・メッセージから

○開会挨拶（要旨） 松山子規会会長

烏谷照雄

会員献詠披講 松山子規会常任理事 森 慎吾
物故会員紹介 松山子規会副会長兼事務局長 渡部平人

渡部平人

中野匡子様 平成二十九年十一月十五日逝去

高橋俊夫様 平成三十年五月二十九日逝去

閉会挨拶 松山子規会副会長 三好恭治

—閉式後—

第九〇八回 松山子規会例会・記念講演

演題「明治維新一五〇年 書簡から読み解く明治人の生き方」

松山子規会顧問 正岡子規研究所主宰 正岡 明 様

○第一一七回子規忌記念写真撮影

校と松山西中等教育学校とで俳句甲子園も行いました。又全国通信制高校教育大会では、記念句「南風子規の見あげし坂の雲」を掲げ、子規さんの明るく時にユーモアを持つ熱い情熱を生徒達に受け継いでほしいと願っています。

○愛媛県知事 中村時広様メッセージ（全文）

第一一七回子規忌並びに物故会員法要が厳かに執り行われるに当りまして、謹んで哀悼の誠を捧げます。

松山子規会におかれましては、本法要をはじめさまざまな子規の顕彰活動を通じ、地域文化の振興に多大な御貢献をいただいております。深く敬意を表します。

終わりに、近代俳句の祖・正岡子規、並びに物故会員の方々のご冥福を心からお祈り申し上げます。

○松山市長 野志克仁様メッセージ（全文）

本日は、第一一七回子規忌の御盛会、誠におめでとうございます。

この度の開催に当り、御尽力いただいた松山子規会烏谷照雄会長をはじめ、関係者の皆様に心から敬意を表します。松山子規会の皆様は、子規の月命日にこの正宗寺で例会を開かれ、その開催は既に九〇〇回を超えています。このように長きにわたり、子規の研究と顕彰活動をされていることに、深く感謝を申し上げます。

私共は子規会の毎月の例会とともに本日の「子規忌」の行事は大切な一日と位置付けております。子規顕彰の諸事業を次世代に受け継いでいただくためにも、今後ともに皆さんの温かいご支援をお願い申し上げます。なお本年度の「子規忌法要」に当たり、正宗寺住職田中義壽師のご助言を頂き、さらに当日の運営全般にわたり小倉葬祭社のご協力を頂きました。改めて関係各位に厚くお礼を申し上げます。

○来賓挨拶（要旨）

愛媛県立松山東高等学校校長 村上敏之 様

旧松山中学校、現在の松山東高校は三日前に創立百四十年を迎えました。生徒たちに、一番に慕われている本校の卒業生は子規さんです。式典後、子規さんが学んだ開成高

さて、松山市では正岡子規を「たから」として、子規を顕彰し後世に継承するよう取り組んでいます。

本日九月十九日は、子規の命日であり、子規記念博物館では糸瓜忌く子規追悼の集いを午前中に開催しました。また、九月一日から九月二十三日までを子規週間とし、全国俳句大会を開催することで子規を顕彰するなどしています。子規記念博物館にも是非お越しいただければ幸いです。

皆様の熱心な御活動が、松山市が進める俳句やことばを大切にしましたまちづくりにつながると考えていますので、これからも御支援と御協力をいただきますようお願い申し上げます。

結びに、松山子規会の更なる御発展と、本日お集りの皆様今後ますますの御健勝と御多幸を心よりお祈りします。

○後記

多くのご来賓、一般市民の方々のご来場を頂き、また会員各位のご協力で無事に終る事ができました事、深く感謝をいたします。

（「第一一七回子規忌」統括・常任理事 高木貞雄）



子規埋髪塔前での墓前祭



例会講演 正岡 明氏



来賓受付



烏谷照雄会長挨拶



第117回子規忌 平成30年9月19日 於 正宗寺

生死の執着と安心

— 一遍と子規と —

三好 恭治

1 はじめに

今回のテーマは「生死の執着と安心」―一遍と子規と―であるが、仏教的な用語では、生死は「しゅうじ」、執着は「しゅうじやく」、安心は「あんじん」である。

『岩波 仏教辞典』（中村元ほか編）によれば、「生死」とは①誕生と死②生まれ変わり死に変わり（輪廻）、「執着」とは執著、「安心」とは安心立命、安心決定で、信仰や実践により到達する心のやすらぎを指す。安らぎに到る途には聖道門（自己への精神集中する自力本願）と浄土門（阿弥陀仏への帰依する他力本願）がある。

伊予に誕生し、「南無阿弥陀仏」を唱えて遊行し「捨衛」「遊行聖」「湯聖」とも称される時宗の始祖一遍と、同じく伊予松山に生まれ、近代文学誕生に一石を投じた正岡子規を探りあげ、二人にとつての「生死の執着と安心」とは何だったかを考察し、今まで論じられなかった二先人の一面を記述できればと願っている。

これからの論述に当たって二つの尺度を用いたい。

一つは古代インドで書かれた「マヌ法典」の人生を四分（学生期・家住期・林住期・遊行期）して理想的な生き方を提示した「四住期」。

他の一つは「論語」（為政第二）にある「吾十有五而志乎學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩」である。

併せて、一遍も子規も出自は支配層・エリートである「武士」であり、そのエートスは「常在戦場 常時死身 臨終安穩」であった。戦前の「教育勅語」に反映されており①「タテ社会（忠孝・長幼序列）」と「イエ（家督相続）」に象徴される。（笠谷和比古「土の思想」 岩波書店）

一遍の陸奥遊行は、祖父通信、伯父通政、叔父通末の墓参旅でもあった。子規二八歳の漢詩「正岡行」では「タダ期ス 青史ニ長ク 姓ノ正岡ヲ記サンコトヲ」と立志を吐露している。

II 一遍の生死への執着と安心

出自

伊予の豪族河野氏の一族である。承久の乱（承久三年（1221））で、一族は後鳥羽上皇方と鎌倉幕府方に別れて抗争した。上皇方は敗北し、通信以下伊予系河野家は所領を没収され、北条系河野家（通久）が総領家として以後伊予国の統治者となる。庶家の得能河野家（通秀）と別府河野

家(通真)は幕府方に加担したので所領が安堵された。別府河野家通広の次男として一遍智真(松寿丸)は延応元年(1239)誕生する。父・通広(如仏)は仏門にあり、母の死を契機に、一遍は伊予・得智山継教寺(師は縁教上人)に入る。母は、北条方の武将大江季光の娘で、季光は安芸毛利家の祖に当る。

河野別府家は仏門に入る者が多い。父・通広は京都で浄土宗の証空に学び「如仏」と号する。その子である一遍の他に、仙阿(伊豆坊)が宝厳寺の祖、聖戒が歓喜光寺の祖で「一遍聖絵」の編者でもある。

「まこと」に一子出家すれば七世の恩所、得脱することはいなれば、亡魂さだめて懐土望郷のむかしの夢をあらためて、華池宝閣の常楽にうつり給ぬらむと、ことにたのもしくこそおほえ侍れ。」(『聖絵』第五・第二段)

学生期

一遍は、河野家一族としても際立ってエリート教育を受け、豊かな学生期を送った。伊予・得智山継教寺で縁教律師に学び「随縁」と名乗る。次いで、法然上人直弟子の証空(浄土宗西山派祖)門下の聖達上人(筑紫・大宰府原山寺)と華台上人(肥前・清水庵室)の元で十三年修行する。華台の命により智真と改号する。

「一遍ひじりは、族姓は越智氏、河野四郎通信が孫、同七

郎通広(出家して如仏と号す)が子なり。延応元年(1239)

亥己予州に誕生。十歳にして悲母にをくれて、始て無常の理をさと給ぬ。つゝに父の命をうけ、出家をとげて、法名は隋縁と申けるが、建長三年(1251)の春十三歳にて、僧善人とあひ具して鎮西に移行し、大宰府の聖達(しょうだつ)上人の禪室にのぞみ給う。

上人学問のためならば、浄土の章疏文字よみをしてきたるべきよし、示し給によりて、ひとり出て肥前国清水の華台上人の御もとにまうで給き。

上人あひ見て、「いづれの処の人、なにのゆへにきたれるぞ」と問給に、事のおもむきくはしくこたへ申されければ、□処の上人、「さては昔の同朋の弟子にこそ、往事おまだわすれず、旧好いとむつまじ、さらばこの処に居住あるべし」とて、名字を問給に、隋縁と申よし答申給に、「隋縁雑善恐難生(隋縁の雑善は恐らく生じ難し)」といふ文あり、しかるべからず」とて、智真とあらため給き。

さて彼の門下につかへて、一兩年研精修学し給ふ。天性聡明にして、幼敏ともがらにすぎたり。上人器骨をかみ、意気を察して、「法機のものに侍り、はやく浄教の秘蹟をさづけられるべし」とて、十六歳の春、又聖達上人の御もとに、をくりつかはされ給けり。」(『聖絵』第一・第一段)

家住期

弘長三年(1263)父(通広)の死により伊予に帰国、還俗して通尚を名乗り、土地を相続し妻子を持つが、兄(通真)の死もあり、一族の間に相克が起きる。一遍は疵を受けなが敵の太刀を奪い取り一命が助かったという刃傷沙汰に発展した。(『遊行上人縁起絵』)

その後一念、発心(安心)し、再出家を選択する。

「夫真俗二諦は相依の法、邪正一如は実業のことわりなれども、『在家にして精進ならんよりは、山林にしてねぶらむにはしかじ』と仏もをしへ給へり。又『聖としか(鹿)とは、里にひさしくありては難にあふ』といへる」(『聖絵』第一・第二段)

発心

発心の契機は、『聖絵』では輪鼓(りゅうこ)の悟りであるとされる。輪鼓(独楽)は「動くものか」「不動のものか」の哲学的思索である。論者も経験しているが、学童の時代に、悪戯鬼たちと独楽で遊んだ。独楽を紐で巻いて力強くしゃくると独楽は唸りを発して回り始める。暫くすると唸りは消え、独楽の軸は垂直に立って左右に揺れることも静止しているかのように見える。そのうち回転が弱くなって倒れてしまう。「動中静」というか、動と静が均衡した時に、「動即静(止)」を感覚的に体感した。

一遍は、輪廻転生なる生死の執着を「自業もしとまらば、何をもてか流転せむ。」と悟ったのである。

「その、ち(父通広帰寂)、或は真門をひらきて勤行をいたし、或は俗塵にまじはりて恩愛をかへりみ、童子にたはぶれて、輪鼓をまはすあそびなどもし給き。

ある時、此輪鼓地におちてまはりやみぬ。これを思惟するに、「まはせばまはる、まはさざればまはず、われらが輪廻も又かくのごとし。三業の造作によりて六道の輪廻たゆる事なし。自業もしとまらば、何をもてか流転せむ。こゝにはじめて、心にあたて生死のことはりを思ほしり、仏法のむねをえたりき」とかたり給き。

「世をわたりそめて高ねのそらの雲 たゆるはもとのこゝろなりけり」(『聖絵』第一・第二段)

林住期

文永八年(1271)春、善光寺に参詣、「二河白道図」を写して帰国し、伊予窪寺(松山市窪野の地と推定)に閑室を設けて二河白道図を掛けて修行「己心領解の法門」を悟る。即ち「十劫正覚衆生界 一念往生弥陀国 十一不二証無生 国界平等座大会」である。

文永一〇年、浮穴郡菅生の岩屋寺(現・四国八十八ヶ所第四五番札所)で参禅、俗塵を捨て、天王寺、高野山に登り、熊野に詣でる。

本宮証誠殿でご神託を得て、遊行・賦算の決意が固まる。「融通念仏す、むる聖、いかに念仏をばあしくす、めらる、ぞ。御房のす、めによりて一切衆生はじめて往生すべきにあらす。阿弥陀仏の十劫正覚に、一切衆生の往生は南無阿弥陀仏と決定するところ也。信不信をえらばず、浄不浄をきたはず、その札をくばるべし」としめし給ふ。

一遍の重大な意思決定は「神託」と結びつくことが多い(神託については後述)この結果、熊野の地で連れて来た妻子(超一、超二)を「今はおもふやうありて同行等をもはなちすてつ。」と伊予に残っている聖戒に文を送っている。

(聖絵)第三・一〇段

遊行期

文永一一年(1274)から正応二年(1289)の十六年余の遊行、賦算、踊念仏の詳細は紙面の都合で割愛せざるを得ない。詳しくは国宝「一遍聖絵」をご覧頂きたい。

『時衆過去帳』によれば、「捨聖」として十六年間の念仏賦算は二十五億千七百二十四人に及ぶ。白川静「字通」では、億とは「古くは十万、のち百万をいう」ので、二百五十万人強である。弘安年間(1278~1287)の人口は四百九十九万四千八百二十八人(『類聚名物考』)であるから、全人口の五〇%に当たる。

一遍の遊行を特徴づけるものは、①遊行(非定住) ②念

*天応二年(782) 七月 淡路島

(注)宝厳寺本堂左脇に一遍歌碑が建立されている。本堂焼失前は050「旅衣木の根かやの根」、現在は015「身をすつるすつる心を」である。

往生

『一遍聖絵』第十二は、一遍の臨終のすべてが記されている。正応二年(1289)八月二三日辰の始(午前七時頃)、兵庫の光明福寺内の観音堂(現 時宗真光寺)が一遍の終焉の地である。

一〇日 所持の経文、譲渡または焼却

一二日 時衆順番に看病。相阿・弥阿・一阿・聖戒は脇座。

他阿は病臥。

一七日 無理に往生すべきか否か迷うが、聖戒の勧めで「定命」に任せる。

一八日 眼中の赤い筋が消えたら臨終と告知。

二〇日~二二日 水垢離

二二日 西宮の祭礼。西宮神主「十念」、播磨・淡河殿夫人

「念仏札」二五〇万一二七二四人目

二三日 晨朝礼賛の懺悔の「帰三宝」が唱えられている中、禪定に入るが如く往生。勢至菩薩(阿弥陀三尊)の縁日に当たる。尚、生誕日は仏陀の涅槃日(二月一五日)である。

仏(南無阿弥陀仏) ③踊り念仏(念仏踊り)であるが、念仏踊りが全国に伝播して今日の盆踊りに定着したという。

神託・夢託

一遍は百数十句の和歌(法歌)を詠んでいるが、著名な歌の多くが神託歌、夢託歌である。仏の御心を歌に託す想いであろうか。

先述の熊野権現の神託が著名であるが、その他にも一遍の宗教観を規定づけた重要な歌を紹介しておきたい。

001 「世をわたりそめて高ねのそらの雲
たゆるはもとのこゝろなりけり」

*弘長三年(1263) 伊予・別府河野宅 (夢託歌)

003 「とことはに南無阿弥陀仏となふれば
なもあみだぶにむまれこそすれ」

*建治二年(1276) 大隅正八幡宮 (神託歌)

015 「身をすつるすつる心をすてつれば
おもひなき世のすみぞめの袖」

*弘安三年(1280) 奥州江刺祖父通信墳墓

036 「極楽にまいらむとおもふこゝろにて
南無阿弥陀仏といふぞ三心」

*弘安九年(1286) 冬 石清水八幡宮 (神託歌)

050 「旅衣木の根かやの根いづくにか
身の捨てられぬ処あるべき」

一遍は臨終に当たつての和歌(辞世)二句を残した。

051 「阿弥陀とはまよひざとりのみちたえて
たゞ名にかよふいき仏なり」

052 「南無阿弥陀仏ほとけのみなのいづるいき
いらばはちすのみとぞなるべき」

(注)漢字置き換え句

051 (阿弥陀とは迷ひ悟りの道絶えて

ただ名(無量寿仏)の通ふ生き仏なり)

052 (南無阿弥陀佛の御名の出づる息
入らば蓮の実とぞなるべき)

III 子規の生死への執着と安心

出自

正岡家の遠祖は風早郡(現・松山市)八反地に住む豪族で河野氏家臣である。越智郡竜岡幸門城主、河野三十二将の一という。江戸時代には松山藩の郡手代として勤め、士分に取り上げられる。

子規の曾祖父に当たる五代常一は、一代御坊主として宗家千宗室から免許皆伝を許され、松山藩茶道役のトップに出世した。六代恒武は茶道を継がず神伝流師範伊東祐根に入門、水練上達により御徒歩に取り立てられ藩士となり江戸在番(後年大小姓格)となる。佐伯家から養子に入った

七代恒尚は馬術師範十河氏に馬術を習っていたと云う。

慶応三年(1867)、恒尚(隼太)の長男として子規は誕生する。母は儒学者大原観山の長女八重で後妻である。正に文武両道に優れた武士の家系と云えよう。

(注)二神将「松山神伝流と正岡家」(『子規博たより』110号) 子規の一生を俯瞰するに最良のテキストは、明治三十二年七月に碧梧桐の兄河東可全に宛てた手紙に添えて送った自分の墓碑銘であろう。

「正岡常規又ノ名ハ処之助又ノ名ハ升

又ノ名ハ子規又ノ名ハ獺祭書屋主人

又ノ名ハ竹ノ里人伊予松山ニ生レ東

京根岸ニ住ス父隼太松山藩御

馬廻リ加番タリ卒ス母大原氏ニ養

ハル日本新聞社員タリ明治三十〇年

〇月〇日没ス享年三十〇月給四十円」

(注)「処之助」は子規の幼名である。後年「越智処之助」というペンネームで「日本人」誌上に芸文評論を発表するが、正岡氏が河野氏と同じ伊予の名門「越智氏」の流れであることに誇りを持っていたのであろう。

この墓碑銘は子規の三十三回忌(昭和九年)に子規の自筆のままに銅板に刻まれ、墓のそばに建立された。その後再建され石に刻まれている。

学生期

松山藩士族としてエリートコースを進学・遊学する。勝山学校(明治八年)―松山中学(明治十三年)―須田学舎(明治十六年)―東京大学予備門(明治十七年)―東京帝国大学文科大学(明治二十三年)。在学中に、当時不治の病とされる結核に罹り、人生計画(哲学者、外交官等)が大きく狂う。明治二十五年帝国大学退学。生涯の友・夏目金之助(漱石)を知る。

家住期

明治二十五年十一月、正岡家東京移転(母八重、妹律)。十二月 新聞「日本」社員。限られた人生の中で俳句革新に乗り出し、「安心」の境地に達し、和歌、近代詩、ジャーナリスト等、多彩な分野に挑戦する。

林住期 遊行期

明治二十八年以降は病臥の体となり根岸「子規庵」での生活が中心となる。林住期・遊行期に該当する時期はないが、病臥期の精神生活では、林住期・遊行期の精神的遍歴を経験していると云えるかもしれない。

生・死・再生

論者は子規の三五才の人生は余りにも短かすぎたが、彼「生が帰か死が帰か夢の世の中の 夢見て悩む我身なり けり」

大嗜血(而立)

〇「身の上や御籤を引けば秋の風」(明治二十八年九月 石手寺「二十四番凶 病事は長引ん命にはさはりなし」)
〇「行く秋や我に神なし仏なし」(明治二十八年年一〇月 小栗神社)

〇「平和なる天下に生れ(略)能く平地波乱的の大事業を成就するならば、其人が徹頭徹尾時勢を造出し技量を驚かざるを得ず。(略)余法華宗の開祖日蓮に於て之を見る。(略)野心は須らく大なるべきなり。」

(明治二十八年八月一〇月『養痾日記』(須磨で病氣静養中、『日蓮記』を読み日蓮に傾倒する。(自力信仰))

禅的悟り

〇「余は今迄禅宗の所謂悟りといふ事を誤解して居た。悟りといふ事は如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思つて居たのは間違ひで、悟りといふ事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であった。(病床六尺)明治三十五年六月二日)

〇「をかしければ笑ふ。悲しければ泣く。併し痛の烈しい時には仕様がなから、うめくか、叫ぶか、泣くか、又

哲学的苦惱

〇「生が帰か死が帰か夢の世の中の 夢見て悩む我身なり けり」(明治二十七年九月 竹村鍛苑 大学予備門)

〇「悟りといふことハ仏教の専有物でハないが・・・悟りは一つであるが、その方法は二つある。自力と他力、聖

通門と浄土門、その極端にあるものとして禅宗と真宗
〇座禅観法と念仏
阿弥陀さまと一処になって始めて絶対の境地に達して悟りが開ける」

「悟りとハ悟らぬさきの悟りなり 悟りてみれハ何もかもなし」 一休禅師(明治二十三年四月 常盤会寄宿舎茶話会)

は黙ってこらへて居るかする。其中で黙ってこらへて居るのが一番苦しい。盛んにうめき、盛んに叫び、盛んに泣くと少しく痛が減ずる。(「墨汁一滴」明治三四年四月一九日)

○「今迄悟りと思ふて居たことが、悟りではなかったといふことを知った。けが寧ろ悟りに近づいた方かも知れん。さう思ふて見ると悟りと気取りと感違へして居る人が世の中にも沢山ある。」(「病牀苦語」明治三五年口述)
「ありのまま」が子規の到達した一つの悟りではないか。

往生

明治三十九年(1906)九月十九日子規庵で没するまでの数日間を、死の床で書かれた『病牀六尺』(明治三五年)から抜粋し、子規の「安心」に迫りたい。

(注)最後の『病牀六尺』の日付は九月十七日であるが、原稿を日本新聞社に送るのに二日間要するので実際は九月十五日であった。九月に入ってから、虚子らが口述筆記をしたと考えられる。

一日『病牀六尺』第一二二(足腫る)

二日『病牀六尺』第一二三「支那や朝鮮では今でも拷問をするさうだが、自分はきのふ以来昼夜の別なく、五体すきなしといふ拷問を受けた。誠に話にならぬ苦

一九日 未明(午前一時)逝去。

子規の達観と安心―絶筆三句について

絶筆三句については多くの俳人、研究者が記述しているが、敢えて「安心」の視座から書き加えておきたい。

まず最初に中央に「糸瓜咲て痰のつまりし佛かな」と書き、次いで右に「痰一斗へちまの水も間に合はず」、最後に左に「をととひのへちまの水もとらざりき」と書き留めた。

「痰一斗」の句は、二三年前に主治医宮本仲医師に子規が贈った句である。宮本仲の「私の観た子規」によれば、「丁度その八月の事、子規が悪かった時、私が直ぐに行けなかった。そこで私が行かないものだから、西瓜の水をいくら呑んでもさっぱり効果がないと云ふ意を含めて詠んだもの」で、子規は快癒を信じた「自力の句」といえる。

「をととひの」の句では、旧曆八月十五日は子規庵近くの上野浄名院の「糸瓜封じ」のお祭りで糸瓜を供えて咒をしてもらうのだが、その水も取らなかつた。「自力から他力に向かう句」といえる。

「糸瓜咲て」の句で自らを「痰のつまりし佛」と表現し、「糸瓜咲て」へちま仏へ成仏する「安心」を得た「他力の句」を詠んだ。

死の数年前に子規は「糸瓜サへ仏ニナルゾ後レルナ」の句を残している。「絶対他力の句」といえよう。(「仰臥漫

しさである。)

一三日『病牀六尺』第一二四「人間の苦痛は余程極度へまで想像せられるが、しかしそんなに極度に迄想像した様な苦痛が自分の此身の上に来るとは一寸想像せられぬ事である。」

一四日『病牀六尺』第二二五「足あり、仁王の足の如し。足あり、他人の足の如し。足あり、大磐石の如し。僅に指頭を以てこの脚頭に触るれば天地振動、草木号叫、女媧氏(じょくわし)未だこの足を断じ去つて、五色の石を作らず。」

一五日『病牀六尺』第一二六(尿)

一六日『病牀六尺』休載

一七日『病牀六尺』第一二七「芳菲山人より来書。(略)俳病の夢みるならんほと、ぎす拷問などに誰がかけたか」

一八日 午前十一時、絶筆三句を記す。

「糸瓜咲て 痰のつまりし佛かな」

「痰一斗 へちまの水も間に合はず」

「をととひのへちまの水も取らざりき」

(注)「誰々が来ておいでるぞな」(最後の言葉)

弔問(陸羯南、碧梧桐、虚子、秀真、鼠骨、鳥堂、拓川夫人、鷹見夫人、碧梧桐姉静、陸まき)

録)

「絶筆三句」の配列から「来迎三尊」(阿弥陀仏 観音菩薩 勢至菩薩)を暗示すると指摘する研究もある。

子規の死は「天命」はおろか「不惑」の年にも達していないので、生死への執着は当然持ち続けたであろうが、「絶筆三句」で安心の境地に達していたと信じたい。

IV おわりに

一遍は「一代聖教みな尽きて南無阿弥陀仏と成り果てぬ」として後継者を拒否した。一方、子規は虚子を後継者に指名したが拒否された。死後、二人の思いはどのように継承されていったか。

一遍の死後、二相他阿真教上人により遊行が持統され、各地に「道場」が設けられた。更に四代目の吞海上人により「遊行派」と呼ばれる今日の「時宗」の宗教形態に組織がされた。一遍生誕地である伊予道後奥谷の「宝厳寺」は一遍の弟である「仙阿(伊豆坊)」により「奥谷道場」が開設されたが仙阿の弟子「珍一房」の死後遊行派に吸収された。このことを一遍は知る由もないのだが……

一方、子規の死後、紆余曲折はあったが、俳句、短歌ともに結社を中心に今日の隆盛を得ている。

「へちま仏」の守り人の句を配しておきたい。

「五十年糸瓜守りて愚に徹す」

寒川 鼠骨

「吾が生は糸瓜の蔓のゆき処」

柳原 極堂

「春風や鬪志いだきて丘に立つ」(俳壇復帰)

「鬪志尚存して春の風を見る」(喜寿) 高浜 虚子

おわりのおわりに、松山子規会(副会長)、一遍会(代表)

表)の大先輩である越智通敏氏の子規と一遍への想いを記しておきたい。(『子規会誌』一一号)

「糸瓜も仏になった。子規も仏になった。糸瓜も子規も仏になった。子規は『糸瓜仏』という仏になった。」

「糸瓜サへ仏ニナルゾ後レルナ」

「成仏ヤ夕顔の顔へチマの尻」

「糸瓜咲て 痰のつまりし佛かな」

「六道輪廻の間には

ともなふ人もなかりけり

独りむまれて独り死す

生死の道こそかなしけれ

.....

出る息入る息をかぎりにて

南無阿弥陀仏ともうすべし」

(一遍 『百利口語』)

主要参考図書

柳 宗悦『南無阿弥陀仏・一遍上人』(春秋社1980)

栗田 勇『一遍上人―旅の思索者』(新潮社1977)

大橋俊雄『一遍』(吉川弘文館・人物叢書1983)

今井雅晴『捨聖一遍』(吉川弘文館1999)

吉川 清『遊行一遍上人』(紙硯社1944)

浅山圓祥『一遍と時衆』(一遍会1980)

越智通敏『一遍 生きざまと思想』(青葉図書1990)

大橋俊雄『法然・一遍』(岩波書店・日本思想体系1971)

橋俊道・梅谷繁樹『一遍全集』(春秋社1989)

『子規全集』(講談社)

和田茂樹『子規の素顔』(愛媛県文化振興財団1990)

和田克司編『子規の一生』(増進社2003)

松山子規会編『松山 子規事典』(松山子規会2018)

越智通敏『子規会誌』(七・一〇・一一・一六・三・八・四〇・

六〇号)

和田克司『子規会誌』(七六号)

三好恭治『子規会誌』(一四九、一五〇号)

(注) 一遍の和歌(法歌)についてはブログ「熟田津今

昔」第六十二章「一遍歌集 全百首」を参照されたい。

[http://home.e-catv.ne.jp/miyoshik/nigitazu/](http://home.e-catv.ne.jp/miyoshik/nigitazu/nigitazu62.html)

nigitazu62.html

(平成三〇年五月例会講演 本会副会長)

湯の山文庫と和田茂樹蔵書

松山兎月庵 小 椋 浩 介

南瓜より茄子むつかしき写生かな

子規言行録にあるこの句が昔から私の大好きな句であり、今の私の居場所のような心境で日々毎々好日らしきものを送っております。

本年は数々の災害が各地であり、愛媛もその甚大な被害地の一つでした。こんな時に古人はどうしていたのだろうと古文書等を調べておりましたら興味のある言葉に出会いました。

「敵わぬと思立つたら鍋を頭に然るべきへ逃げるが由」(温故録)

この記述を目にしてから私は鍋の在処を日々確認しております。

天災地変の度に失っていく物、そして人の無知や怠慢で失っていく物、失い方は様々ありますが後者だけは如何にしても避けたい思いが強くなります。

昨年、孟蘭盆の少し前にかねてより行き来のあった故和

田茂樹(愛媛大学名誉教授)先生のご実家(ご子息3名)より、明治二十三年築の屋敷取り壊しの件、家財の大半の仕分けと処分依頼があり、私が現在運営しているギャラリー、鑑定業務の拠点としている持田町の「奥平家」とも親戚にあたること、長男の故和田克司先生との交流もあり、猛暑の真っ只中ではありましたが引き受けさせていただきました。

母屋、納戸部屋等々に仕舞われていた美術品、書画、人形、絵馬等の鑑定と査定を全て終え、書籍の話になった時、五万点を越えるその質量と真夏の暑さで後退りをしたのを鮮明に覚えています。

私が若い健常者であったなら嫌々ながらも引き受けた仕分けであったと思いますが、8年前に急性心不全で倒れ、生死をさまよいながら拡張型心筋症という特定疾患(難病)を告知され、無理のできない体であったことがさらに書庫の仕分けだけは敬遠したかった経緯があります。

しかし、それでも資料的に貴重な物、郷土の宝、何とか遺し活用できないものかと関係機関、有識者等に問い合わせましたがやはりその莫大な量と運搬、場所の確保や取り扱う人材面でいずれもNGでした。

そんな折、三十年近い交流のある不動産会社の社長から以前から聞いていたことではありましたが、そろそろ二番町のあそこに愚佗佛庵を建ててみようかと思うのだが手

伝ってくれないかという相談があり、当然ではありませんが私は二つ返事で賛同させていただきました。

翌日、和田邸階段、通路、さらに三部屋を埋め尽くす書庫を見渡した時、和田茂樹先生の遺影が机の隅にあり、何となく目が合い、未来の愚陀佛庵と周辺をイメージした時、「これはやるしかないな。」言葉には出しませんでした。足の踏み場もない書庫に向かいました。

弟子を含む協力者、和田先生のお孫さんたち、合わせて八名で無数にある書籍を一冊々次の間まで運んでもらいましたが装丁と中身の違うもの、莫大な道後や民謡などの資料があり、後で聞いた話ですが三ヶ月という家の取り壊しの期限内に間に合わせるのは誰もが不可能と考えていたそうです。

書庫のと真ん中に和田茂樹先生の遺影を掲げ、取り憑かれたように古文書や古書、さらには古地図、書簡等を15種のカテゴリーに仕分けをし、途中で協力してくれた後輩の奥道後老湯の守の坪内社長の計らいで「湯の山文庫」(三万五千点蔵)設立という新たな展開をしていくことができました。

—奥道後老湯の守「湯の山文庫」和田茂樹蔵書—

- 『飯待つ間』 正岡子規
- 『墨汁一滴』 正岡子規

- 『正岡子規文学読本』 河東碧梧桐編
- 『子規言行録』 河東碧梧桐
- 『正岡子規文学読本』 河東碧梧桐編
- 『正岡子規「歌よみ」の魅力』 歌壇
- 『病詩人の日記』 川村敬吉
- 『子規句集(岩波文庫版)』 高浜虚子編
- 『子規居士』 柴田宵曲
- 『友人子規』 柳原極堂
- 『正岡子規』 井手逸郎
- 『正岡子規』 高浜虚子
- 『正岡子規』 齋藤茂吉
- 『子規の回想』 河東碧梧桐
- 『正岡子規』 井手逸郎
- 『子規諸文』 山口誓子
- 『子規句解』 高浜虚子
- 『子規の話』 柳原極堂
- 『子規居士研究』 茂野冬篋
- 『子規選集』 正岡子規著 寒川鼠骨編
- 『子規といふ人』 五味保義
- 『正岡子規』 岡麓
- 『正岡子規』 楠本憲吉
- 『正岡子規』 福田清人 前田登美
- 『子規遺稿散策集』 正岡子規

- 『病牀六尺』 正岡子規
- 『仰臥漫録』 正岡子規
- 『歌よみに与ふる書』 正岡子規
- 『漱石・子規往復書簡集』 和田茂樹
- 『俳人蕪村』 正岡子規
- 『子規全集』 正岡子規
- 『子規選集』 正岡子規
- 『人及び芸術家としての正岡子規』 西宮藤朝
- 『子規句集』 正岡子規著 千葉保編
- 『新釈正岡子規歌集』 橋田東聲
- 『子規全集』 正岡子規
- 『正岡子規全傳』 橋田東聲(丑吾)
- 『芭蕉蕪村子規三聖俳句全集』 木村三樹
- 『子規全集』 正岡子規
- 『正岡子規』 齋藤茂吉著
- 『子規 節』 佐千夫の文学』 黒沢隆信
- 『子規を語る』 河東碧梧桐
- 『松山に於ける子規と漱石』 景浦直孝
- 『正岡子規 根岸短歌会の位相』 小泉芝三
- 『芭蕉・蕪村・子規』 荻原井泉水
- 『子規名句評釋』 青木月斗
- 『正岡子規の新研究』 宮田戊子
- 『子規以前の明治俳諧』 勝峰晋風

- 『正岡子規』 真下五一
- 『人物叢書 正岡子規』 久保田正文
- 『子規時代の人々』 亀田喜一
- 『写生文派の研究』 福田清人
- 『森田義郎と子規・飄亭』 山上次郎
- 『齋藤茂吉全集20 伊藤左千夫・正岡子規』 齋藤茂吉
- 『写生俳句及び写生文の研究』 北住敏夫
- 『松山に於ける子規と漱石』 影浦直孝
- 『日本の詩歌3』 『正岡子規』 伊藤左千夫 長塚節 高浜虚子 河東碧梧桐著 伊藤信吉他編
- 『子規俳話』 正岡子規
- 『子規の話』 柳原極堂
- 『子規全集』 正岡子規
- 『伊予の俳諧』 星加宗一著
- 『伊予路の正岡子規 文学碑遺跡散歩』 鶴村松一
- 『子規と漱石—その交遊と足跡』 愛媛新聞社
- 『正岡子規の研究下』 松井利彦
- 『正岡子規の研究上』 松井利彦
- 『友人子規』 河東碧梧桐
- 『子規と漱石』 和田利男
- 『子規全集』 正岡子規
- 『子規と虚子』 山本健吉

- 『正岡子規故郷松山平野の文学風景』 鶴村松一
 『正岡子規故郷松山の文学風景』 松山郷土史文学研究会
 『正岡子規をめぐって』 景浦稚桃
 『子規文学論の研究』 室岡和子
 『伝記 正岡子規』 松山市教育委員会編
 『子規句解』 高浜虚子
 『俳人の書画美術 7 子規』 和田茂樹
 『子規と碧梧桐』 栗田靖
 『正岡子規・その文学』 久保田正文
 『正岡子規・その文学』 久保田正文
 『子規・虚子』 大岡信
 『子規歳時』 越智二良
 『文芸読本正岡子規』 清水勝
 『正岡子規』 粟津則雄
 『正岡子規』 岡井隆
 『子規俳句索引』 松山市立子規記念博物館
 『子規と漱石と私』 高浜虚子
 『子規俳句索引』 松山市立式記念博物館
 『子規と周辺の人々』 和田茂樹
 『子規と周辺の人々』 和田茂樹編
 『正岡子規』 桶谷秀昭
 『正岡子規と万葉集』 牧野博行
 『季語別 子規俳句集』 松山市立子規記念博物館

- 『正岡子規と上原三川』 宮坂静生
 『子規と漱石』 ???
 『子規・虚子・漱石』 松井利彦
 『子規山脈の人々』 室岡和子
 『子規会誌』 松山子規会
 『正岡子規』 和田茂樹
 『正岡子規 ―人と文学―』 越智通敏
 『士魂の文学正岡子規』 松井利彦
 『子規虚子碧梧桐写生文派文学論』 相馬庸郎
 『正岡子規と藤野古白』 久保田正文
 『国文学 解釈と教材の研究 正岡子規』 茂原輝史
 『正岡子規』 和田茂樹
 『子規と漱石』 松井利彦
 『子規随考』 坪内稔典
 『子規・虚子』 大岡信
 『子規会誌』 松山子規会
 『子規に俳句を学ぶ』 立川淳一
 『正岡子規の短歌の世界』 今西幹一
 『正岡子規根岸短歌会の位相』 小泉芝三
 『子規 百首百句』 今西幹一 室岡和子
 『正岡子規からの手紙』 三枝昂之
 『正岡子規からの手紙』 三枝昂之
 『子規会誌』 松山子規会

- 『正岡子規を語る』 粟津則雄
 『正岡子規』 坪内稔典
 『子規会誌』 松山子規会
 『海棠花 子規漢詩と漱石』 飯田利行
 『俳句で読む正岡子規の生涯』 山下一海
 『子規とベースボール』 神田順治
 『子規言行録』 河東碧梧桐編
 『子規言行録』 河東碧梧桐編
 『子規言行録』 河東碧梧桐編
 『正岡子規』 国崎望久太郎
 『子規からの手紙』 如月小春
 『正岡子規入門』 和田茂樹監修・和田克司編
 『藤村の破戒と正岡子規』 亀田順一
 『正岡子規の世界』 寒川鼠骨
 『正岡子規評伝』 小林高壽
 『子規・漱石・虚子』 柴田奈美
 『子規点描』 喜田重行
 『子規・茂吉の原風景』 伊吹 純
 『子規・茂吉の原風景』 伊吹純
 『正岡子規・作家論集成』 岡井隆
 『正岡子規歌集』 宮地伸一
 『正岡子規』 梶木剛
 『子規会誌』 松山子規会
 『風呂で読む子規』 和田克司

- 『正岡子規の面影』 塩川京子
 『子規秀句考 鑑賞と批評』 宮坂静生
 『正岡子規 ベースボールに賭けたその生涯』 城井睦夫
 『子規と近代の俳人たち』 稲垣麦男
 『正岡子規の教育人間学的研究』 工藤真由美
 『子規の文友柳原極堂の生涯』 二神将
 『子規山脈』 坪内稔典
 『子規の時代』 小林高壽著
 『子規の時代』 小林高壽
 『子規のココア・漱石のカステラ』 坪内稔典
 『子規解体新書』 粟津則雄・夏石番矢・復本一郎
 『子規会誌』 松山子規会
 『子規の近代―滑稽・メディア・日本語』 秋尾敏著
 『子規の近代・滑稽・メディア・日本語』 秋尾敏著
 『子規・虚子文学の遠近』 畠中 淳
 『熊楠の家・根岸庵律女・小幡欣治戯曲集』 小幡欣治
 『正岡子規没後百年記念特集』 神奈川大学評論
 『俳句の明日へII―芭蕉・蕪村・子規をつなぐ』 矢島渚男著
 『子規・写生』 沢木欣一
 『子規と古典文学』 田村憲治著
 『子規随筆』 正岡子規
 『正岡子規と俳句分類』 柴田奈美

- 『子規の苦闘』 立川淳一
 『子規庵要紀』 寒川鼠骨著 子規庵保存会編
 『正岡子規の房総旅』 関 宏夫
 『子規―活動する精神―』 玉城徹
 『佐藤紅緑 子規が愛した俳人』 復本一郎
 『子規と四季のくだもの』 戸石重利

その他

高浜虚子・河東碧梧桐・内藤鳴雪・夏目漱石著書

1800点

俳諧各書籍・万葉集・古典文学書籍 250点

各市町村誌 115点

和田茂樹著書 全種

愛媛の民謡に関する書籍 70点

その他

18000点(俳句雑誌・文庫本含む)

十一月二十九日、空っぽになった本棚を全員で拭き掃除をしてピカピカの書庫になった姿に涙するスタッフもあり、様々な感動を覚えた三ヶ月でありました。

その後、奥道後と持田でさらに厳選仕分けを重ね、和田茂樹先生、克司先生が夢見た「蔵書公開」(一部)を一月に主催させていただき、お二方の所縁が深かった子規会、そ

して松山子規会・井手康夫会長にテープカットをお願いします。次次第であります。



「湯の山文庫」テープカット

さらに本年五月には子規会例会におきまして卓話をさせていただき、これまでの経緯とこれからの書籍の活用や愚陀佛庵のビジョンなどを話させていただきましたことは私にとって実に有り難く、これからの本来の松山の文化保存、本質に重きを置いた文化発進への大きな励みになりました。現在「奥道後湯の山文庫」には初版を主に三万点あまりの古書を保管運用しており、何方にも無料で閲覧できるよ

うになっております。(フロント経由)



「湯の山文庫」展示室

尚、愚陀佛庵の事業計画は周辺の城下町としての松山復元と同時進行しております。行政からの協力も早々に申し出がありました。これまでの一過性のイベントパフォーマンススでの人集めから少し離れ、足元にある本物の宝を見いだし、先人たちが遺した本質的な思いや、ガラス越しではない文化造詣を発信できる核になれるよう主旨を理解していただきました。

尚、愚陀佛庵に関しましては疎開することができた小品

に至る調度品まで当時のものを展示し、当時のあるがままの空間を感じていただく施設とし、子規と漱石、子規周辺の直筆の書簡や消息、古書籍など、さらには松山藩資料・美術品等と合わせて近隣の松山お城下ミュージアムを設立し、公開していく方向で検討しております。その試行及びステップとして私が居る持田町のギャラリーを暫定的に「体験ミュージアム」とし、テーマを実際に体験していただくことになりました。

―ご案内―

松山兎月庵で、平成三十年十月より豫州松山の希少古文書、伊予人直筆掛軸及び直筆書簡、直筆消息、江戸期の和綴じ本1400点あまりを随時公開させていただきます。

〈鎌倉〜江戸時代の資料〉

松山草談全巻、豫陽盛衰記、伊豫湯下駄、伊豫下駄、松山実録、南海治乱記、伊豫温故目錄、日本惣領守大山積大明神御神記、萍窓集序禱堂、幸聞集全、伊豫文学資料1、19、豫州安西往生記、道後温泉記、花入塚、中山物語、大海集上下、古今和歌集、菅家遺誡、沙石集、俳諧七草、蟹人少女玉取草神、紫山楷草帖、花市會、俳諧雅楽、修身児訓、桑折宗臣日記、土佐日記、御成敗式目、方丈記他

（特に貴重な資料）

伊予人俳諧書籍（栗田樗堂含む）、松風会句稿、子規を語る（自筆装丁）三種、与謝野鉄寛・晶子草稿、ホトトギス全巻（明治松山版初版）、渋柿全巻、アララギ他俳句研究等の冊子、

藤の首途（栗田樗堂）、愚陀佛庵資料、道後温泉資料、松山藩役職及び石高、赤穂浪士預り帖

他438点

◇実物閲覧可（研究目的及び調査目的の来館者のみ）

◇場所 松山市持田町3丁目1の22

◇問い合わせ先 電話0899345988・携帯09037880394

◇入場料など 小学生・大学生 無料

大人 500円

開館10時・閉館17時（不定休）

展示内容は二週毎に変わりますので何卒ご了承くださいませ。

尚、本年十月中旬より「松山兎月庵」「松山歴史文化ミュージアム」（仮称）として蔵書と共に私が30年あまりの間に出会った豫州松山窯古陶磁・古紙部・藩絵師書画・道後水月焼等を展示させていただいております。

尚、運営及び維持管理、各研究者の育成をふまえて入館

の発行、東京への移転、両者に深く関わっているのが正岡子規である。極堂の「友人子規」と子規、虚子の書簡を通してその間の事情を辿ってみる。

一、松山で「ほととぎす」の発刊

松風會は子規東歸後と雖も相變らず俳句熱旺盛にして、月一回の例會にあきたらず、隨時會員等の宅に俳會を催して其の會稿を子規に送り、選評を請ふなど盛にやつてゐたが、二十九年の末ごろより次第に萎靡沈衰し始めた。一略一松風會は斯くの如きはじめなる状態にありしが、シカモ子規の唱ふる新俳句は次第に世人の認むるところとなり、單り松山のみならず伊豫全般に亘りて其の共鳴者賛同が各地に擡頭するの情勢を示し、無聲會其他の小集團もボツボツ顯はれ初めたれば、松風會の衰亡の如き深く之を念とするに足らず、寧ろ此の新勢力を糾合して子規の革新事業を後援するに如かずと予は固く信じたのであった。

されど之を爲すには矢張り子規を中心となし、其の力を借るの外他に策はなかるべきも、子規をして其の勢力を特に我地方に傾注せしめんこと又容易の事にあらず、尋常の方法にては尋常の結果に終るのみなれば、此處一番勇猛心を振つて突飛なる解決方法を講ぜんものと予はひそかに畫策する所があつた。是ぞ即ち明治三十年一月の「ほととぎす」創刊となつたのである。

は有料となります。

前述の状況の中で限られた時間しかありませんが、文化都市松山……。本当に中身を伴う都市でありたいと心から願いつつ、民間でどこまでやれるか試行錯誤を重ねて参りたいと思っております。

この先も子規会の皆様方のご理解とご協力を賜り、それぞれの調査研究が益々熱を帯びることを心から願っております。

（松山兎月庵 小椋浩介）

「ほととぎす」松山から東京へ

ほととぎすは余の生命なり 子規

松浦 卷夫

はじめに

柳原極堂によつて松山で発行された「ほととぎす」創刊号（明治三十年一月十五日）が、翌三十一年十月十日、極堂の手から虚子に移り、東京版「ホトトギス」（第二巻一号）を発行。極堂がなぜ僻陬の地松山で俳誌を出し、一年有余にして東京の虚子に委ねることになったのか。松山で

『友人子規』柳原極堂

ほととぎす発刊の辭

伊豫派俳諧とは他よりつけたる名なり、鳴雪、子規、虚子、碧梧桐、飄亭等先學諸子の俳諧復興に與りたる効力を云はんとして其のいづれも伊豫出身なるが爲に斯くは云ふならん、文學に地方的派名を冠するの穩かならぬものから新調を云ふに明治調と稱せんは或は可ならんか、新調の機運日に隆にして既に天下を風靡し所謂月並み流者を壓倒せんとす、愈益進まば以て俳界の革新を爲すに幾庶からん、先學諸子の効偉なりと謂ふべし、一略一

余等微力を顧みずして雑誌ほととぎすを発刊するものは、新調流布伝播の便を得んとするにあり、斯道の進歩發達を圖らんとするにあり、從來地方新聞の文苑欄を假りて此の目的を成さんと計りしが、今や専門雑誌にあらざれば以て之を全うする能はざるを見る、即ち爰に此舉あり、後學者は之に據て先學諸子に接近仰聽し、先學諸子は之に據て後學者を誘教指導するを得、俱に共に斯道に就いて究めなば余等の期する處或は成らん、即ち天下に應て以て明治俳諧の革新を成就し得んか、初めて伊豫派俳諧の名譽を地方全體の名譽となし得んなり、雑誌ほととぎすは、實に先學後學の間を斡旋して斯道の進歩發達と新調の流布傳播せんことを期す、以て發刊の辭となす。「ほととぎす」壹號極堂

ほととぎすの発刊を祝す

子規子

わが伊豫の國は古き代より開けて家も多く人もかしこき處なるを、さすがに海を隔てたる島國なればにや、畿内中國との往来も便あしくて、いつも本土の競争に勵まざる、ことなく、はた關西のいくさにだにたざざること少なく國を鎖して、桃の林に牛を放ちたるありがたさは、二千餘年の間の伊豫史は取り出で、いふべき大事もあらず、又天下に誇るべき人物も出でざらしめしこそなかなか口に口惜しけれ。 — 略 —

こゝに世は明治三十年と變りて文運は南海の空に方りて稍盛ならんとするの兆あり。俳諧雜誌「ほととぎす」の發刊の如きは其一例にあらずや。われは偏に此雜誌の榮えて金玉の句の多く出でんことをこそ望むものなれ。さはいへ郷里の諸君に向つて強ちに専門の文學者たれといふにはあらず。一箇人として有名なる俳人たらずとも一団体として若しくは一國として特色ある俳諧を爲さんことを願ふものなり。 — 略 —

猶他國の人をして島國よと罵らしむることの何ぼう残念ならずや。此恥を雪ぐためには團體をつくりて切磋すること必要なるべく、團體をつくりて切磋するには雜誌の發刊も必要なるべし。今ほととぎす生れたりといへども猶かひこの内にあり。他日一聲月掛け山裂くるの勢を養はんとするには同志諸君の扶助に俟つ所多からざるを得ず。ほととぎす

と、ぎす亦自ら勉めざるべけんや。

新年や鶯啼いてほととぎす

ほととぎす第一號諸新聞評

●海南新聞評

當地俳士の手に成りし俳誌専門雜誌「ほととぎす」初號は去十五日發行されたり、取て之を見るに體裁先ず好し、「ほととぎす」と書かれたる題字は下村牛伴子の筆なりと聞く氣品あり表紙いやみなければと桃色の絲にて綴じたるは寧ろなくもがなと思はる。印刷は地方の出來として申分なし、紙質の毛少し良からんを望む、中村不折子の口繪、月に時鳥は流石健腕。 — 略 — 獺祭書屋主人の俳諧反故籠、五洲子の俳諧意見略 — 地方の俳誌之に據て先輩と接近し斯道に就て究むる深からば伊豫派俳諧の旗幟を高くして天下に靡き俳諧の革新を成すを得ん、吾輩は地方俳諧の爲に喜で本誌の發生を迎ふるものなり、地方人又此有望兒を鞠育するに助めざるべからず

●愛媛新報評

伊豫派唯一の機關雜誌なれば苟くも俳句に志すもの讀で俳句上の新智識を得るのみならず其進歩に於て大に利する所ある可し、

●芸備日々新聞評

明治俳諧壇に起て新調を唱導する鳴雪、子規、碧梧桐、飄亭等の諸俳士は共に伊豫の出身なるより今回同地の松山市大字立花町五十一番戸に於て其機關雜誌「ほととぎす」第一號を發行したり

●土陽新聞評

隣国伊豫は鳴雪子規虚子碧梧桐飄亭等當世新進作家、輩出せし處なり本誌は則ち伊豫派俳諧の機關雜誌にして斯道の進歩發達と新調の流布傳播を期するにありといふ

「ほととぎす」の一周年に際して

升

「ほととぎす」は明治三十年一月を以て世に生れ今や一年にしていよいよ其光輝を放たんとするあるを見る、吾人明治の俳壇に馳驅する者豈賀せざるべけんや、「ほととぎす」が既往一年間に於ける進歩發達は實に驚くべき者ありと雖も之を遠大の目的を有せる吾人の眼より視れば僅かに一步を進めたるに過ぎず、未だ以て功に誇り成るに安んずるの時に非るなり、聞くならく近者「ほととぎす」を讀む人伊豫以外に於て其數を増せりと、初め地方的性質を帯びて生れたる一小雜誌は僅に一年にして漸く地方的範圍を脱して全國の俳句界を風靡し去らんとす、吾人は俳句界のために將た「ほととぎす」のために太白を浮べて賀せざるべ

けんや、前途はより遠し、「ほととぎす」健在なれ。 — 略 —

然れども吾人が常に耳にする所を以てすれば、俳句界に入りて忽ち小成に安んじ謂ゆる天狗的なる者に至りては比較上地方俳人に多しと聞く、事の真偽は固より知る所に非ずといへども萬一此の如き事あらんか地方の俳句界は日ならずして腐敗し了らんとす、是れ杞憂措く能はざる所以なり、今や俳句は漸く地方に傳播し將に僻陬に及ばんとす、俳句界の運命が地方俳人によつて支配せらるゝの日應に遠きにあらざるべし、地方俳人諸君の任夫れ重いか、(十二月廿六日稿)

つくぐと來年思ふ燈下かな

ほととぎす第十三號 明治三十一年一月 三十日發行

二、松山から東京へ

好事魔多しとか、表面斯の如き「ほととぎす」も其裏面には已に憂ふべき動搖を生じてゐたのであつた。一年前には獨り自ら進んで地方俳壇のために俳誌を出さんとする程の熱意と勇氣を示した自分が、今は早くも「ほととぎす」より遁避しようとして企て、ゐたとは餘りの豹變に自ら驚かざるを得ない。子規に向ては地方政黨の幹事に推されて最早時間之餘裕が無いからなどと退却の理由を並べたが、原稿は殆どすべて外部より供給され、編輯は敢て無秩序に甘んじ、印刷製本は擧げて河圖、金波の二子に囑し、自分を要する

ものとは皆無と言つて然るべきに、何を稱して時間の餘裕なしといひ得ん、其理由は全く問題となり得ない。要するに予の俳道心の退轉である。元來遠大なる目的と鞏固なる決心なく、唯一時の意思に驅られし其薄志弱行の結果である。

『友人子規』 柳原極堂

子規から虚子へ 明治卅一年七月一日

(サテコレカラガハジマリ) 雑誌の事は小生は以前より首を傾げる一人にて今でも首を傾げる。其理由は澤山あつて混雜して居つて一寸説明しかねるが要するに何となく安否に思ふ 其安否に思ふは何故かと尋ねると則ちいろ／＼混雜して居る どういふて善いやら分らぬがマア次にいふて見よう 後や先にならうが 第一賣れぬといふことぢや二千部など、いふは思ひもよらぬ 俳句専門ならば五百部位が高ぢやないかと思ふ それを賣つて行かうといふのは技倆がいる たとひ宗匠的の卑劣手段を取るとしても直に賣れるものでは無い それ相應の技倆(コレハ俗な技倆)がいる 況して成るべく高尚にしておいてそれで賣り出さうといふには大抵な事ぢやない 其技倆即ち賣れるやうな雑誌を捧げる技倆が貴兄に無いと思ふ 若し自惚を打ち明けていはゞ小生が持つて居るほどの技倆も貴兄にはあるまいかと思ふ これは一つは貴兄に経験が無い故ぢや 「日本人」の経験は寧ろ悪い経験であらう 「日本人」のやうな不整理な氣まぐれな雑誌(めさまし草も同様)で賣りださう

俳句作る上に於ては貴兄等は實に旨い たとへ第一流の佳句といふ者は少いとしても全體が生きて居る 第一流の佳句も無論多いやうだ 其點になると小生は慚愧千萬だ 實に煩悶に堪へぬ 病氣といふ事は一時のいひわけになるかは知らぬが純粹の文學界の方面より見ればいひわけにならない 又自分もそんな卑怯なことを考へては居らぬ 併し矢張弱點があつていひわけにはならぬけれど病氣は慥に不振の原因をなして居ると思ふ いひわけにはならぬ原因になつて居る 小生の心の中は察してくれ給へ それにも拘らず平氣でやつてゐるものは不景氣で若しくじけたらいい／＼墮落するであらうと心配する故だ 醫者は常に興奮劑を與へるけれど小生は飲みたく無い 小生は常に興奮して居る どんなに身體が衰弱しても精神は興奮して居る

身體衰弱+精神興奮=煩悶

(とでもいふ方程式になりさうだ)

併し世の中へ立て雑誌でも出さうといふやうな一部俗的の事になると貴兄は未だ小生に及ばぬ所がある 少くも貴兄は小生より六歳許り若い 雑誌の體裁などの事は小生に任すとの御言葉は單に禮儀許りで無く或は幾何か小生の技倆を認めて居られるかとも見える さうすれば小生も多少の自信があるから事務的の小生は一切雑誌の編纂上の事を擔當して詩人的の貴兄等の作を整理して行くといふ姿になる よろしい引受けてやつても見たい 併し天は我輩の成

といふのは長い日月を要する事で長い日月を要するといふ事は多くの金を要するといふことぢや 御承知でもあらうけれど「日本人」の資本は三百圓や四百圓ではない筈ぢや それで原稿料といふやうなものには餘り拂はず社員といふものも同人の二三人であれだけの履歴があつて三宅の名望があつてそれであの通りぢや 別に利潤といふ事は無いやうぢや それぢやれ少し賣れる様な雑誌を出すこと云ふには相當の技倆がいつてその技倆は貴兄には無いやうぢや 小生に十分技倆があれば善いがそれもむづかしい 併しそんなに石橋を叩いても埒があかぬから小生には技倆があると假定して話を一步進めやう 小生には技倆があるとすれば其技倆はどんなものかといふと一寸空論で現すことは出来ぬが先づ第一に種々の變化した者が一號の内に備つて居らねばならぬといふ事ぢや これが貴兄に出来まいと思ふ處である。發句の撰抜といふやうな事の外に何か自分が書くといふ場合に貴兄は何種の變化した者を書き得らる、と自信し給ふか 小生が嚴酷に評すると貴兄は一種より外に得書き給はじと思ふ 一種とはいふ迄も無く「日本人」に出たやうな「俳句入門」にあるやうな俳句論である 若し寛にいふなら二種となるかも知れぬ 「日本人」に出たやうなもの(議論的攻撃的辯護的)一つ「俳句入門」に出たやうなもの(教訓的批評的解釋的)一つ 併し此兩者も貴兄の筆になると趣が大變善く似て居る — 略 —

功を嫉んで居る 何故か運命は我輩をめたかたきとねらつて居る 四隣の萬物は少し頭を出さうとする我輩を無理やりに抑へつける 日光は曾て我が顔を照さぬ 雲は日を掩ふて居る 月は常に缺けて居る 満月の時は雨がふる 只の一日一夜でも平和に暮らす時は無い 數日前寒暖計が九十五度に上つた 暑いのはそれ程苦まぬ小生も餘り苦し過ぎると思ふて驗温器を取ると卅八度七分あつた 卅八度七分の熱を熱と知らないで天氣の熱いと間違へて居る位ぢやけれ平生いかに苦に馴れて居るかは分るであらう 苦に馴れるといふはいつも苦んで居るといふ事ぢや

「ほとゝぎす」に書くのは實に骨が折れん 東京でやつたら遙に骨が折れるであらう 其の骨折れん「ほとゝぎす」でさへ毎月書くのが實に苦しい 苦しくて無理に書くそれは小生が書かなければ雑誌が出来まいかと思ふて心配する故である 誰も責任を以て書く人が無いのぢやもの 現に貴兄なども「ほとゝぎす」にちつとも力を盡されぬ それでも死ぬる思ひをしてゞも小生が書ける時は先づよろしい 併し小生は少しもあてにならぬ イツ大病にやられるやら分らぬ たとひ小生が雑誌の體裁などと、のへて置いても小生が病氣したら誰が代理をやるであらう 歴史的の記事議論などは事實を知つてさへおれば誰にでも議論が出来るが知らなければどんなえらい人にも書けぬ 未來の貴兄は知らぬが今日の貴兄には恐らく出来まい これが第一

番の困難ぢや 併し雑誌には歴史的の部分が無くしてはならぬといふ事もあるまじく又諸君にても全く歴史的の事が書けぬといふ譯でもなければそれはいいとした處で第二の困難は貴兄らの勞力が續くや否やといふ事なり

—略—

東京で出す雑誌は「ほと、ぎす」の倍位は無くしてはならぬ故少くも貴兄は新聞一頁若しくは二頁位の分量を引受る覺期なかるべからず 此覺期は出来るか如何 貴兄は今迄でも「ほと、ぎす」に何も書かぬ積りではなかりしならん何か書くつもりであつても何も書けぬは貴兄の今迄の狀態なり 小説も新體詩も歌も作るつもりであつてもそれ皆無なるにあらずや それには家事とか何とかのいひわけあるべし 併し雑誌を拵えて置いて今度は家事のために發兌せなんだといふても何のいひわけにもならぬなり 家事のために雑誌不整理であつたといふ事もいひわけにならぬ 貴兄も自ら言はるゝ如く何所迄も引受る以上は何所迄も勉強せねばならぬ 飄亭、碧梧桐、露月等には多きを望む事出来ぬ つまり貴兄と小生と二人でやつて行かねばならぬ 若し小生病氣したら貴兄一人でやらねばならぬ 貴兄病氣したら小生一人でやらねばならぬ 病氣拵いふ事はとりのけとしても小生は惠原邊から三阪を見上げたやうな心持がする 「ほと、ぎす」のためでも苦んで居るがそれよりまだ餘計な苦勞を要するかと思ふと今から息がきれるや

頼まぬ自分ひとりでやらいでと思ふてやつて居る 苦しい事は話にならぬ 試に恨をいふなら貴兄等は存外冷淡な今度雑誌を出したら貴兄は必死にならるゝであらう 極堂と同日の論ではあるまいと思ふけれども今迄の事を思ふと何やら心細い處もある —以下略—

虚子から子規へ

拜復、地球の意思を雲が壓へて居る爲であらうか非常に熱い、大兄別にお變りも無いが、—略—

此の頃は食後一時間を限り道後温泉に入浴するを常としてゐる、小生の最も善き分別も湯の山から流れ出るやうに思はれる、其の夜も其の儘温泉に赴いた

昨日更らに小さな古机に、倚つて靜かに再び玉書を讀んだ、大兄の稍裂しき論鋒は大に小生の弱點を衝いて居る、ギク／＼と一々こたへる、併し小生は他方に立つて言譯しやうなど、は思はなかつた、大兄と共に口を揃へて矢張自身を抗撃しつゝ、あるやうに覺えた、甚だ會心の事であつた、—略—

然り大兄と二人でやる、大兄が御病氣の時は小生獨りでやる、小生に歴史的知識(即學問)のないことは此の頃自分でも甚だ恥ぢて居るところである、小生の忍耐力の過去に於て甚だ薄弱であつたことも亦自ら大に恥ぢて居る處である、爾後は誓つて學問をする、石にくひついても今後の

うな只貴兄の決心次第だ 今一つ氣になつて居るのは「俳諧」といひ「小日本」といひ小生の關係した物は盡く失敗に終つた 尤も小生が自ら發起した者は無い 小生自ら發起した事があるならそれは小生の生命と終始すべきものであるけれ小生は中々發起などせぬ 併し幾ら他人に誘はれたものでも三度となると少しは小生の男にもかゝる 「ほと、ぎす」は三度目ぢやけれ代りの雑誌が出来りや格別さうでなければどうかして倒さぬやうにと心がけて居る それであるから今度の計畫に就いても二の足を踏む次第ぢや 併し男ぢや貴兄の決心次第ぢや 貴兄はたやすく決心する人でなかなか實行せぬ人ぢや これは第一書生的の不規則な習慣が抜けぬためであらう 第二には感情が強くて意思を壓するためであらう 第三には目的が未來の快樂よりも寧ろ多く目前の平和にあるためであらう 今度若しやるなら臍を固めてやりたまへ いや／＼やると決まれば小生は刑場に引かるゝ心持がする 小生ひとり必死でやるのに貴兄が存外冷淡であつたり疲勞して寐てしまつたりせられては困る 「ほと、ぎす」でも極堂が發起して小生に頼んで居る間は少くも氣分が樂であつた 先日極堂がやめるといふたのを小生が續けてやつてくれと頼んだ後は今度は責任が小生に歸して小生から常に手をさげて極堂に頼むやうなありさまぢや 従つて此月病氣ぢやけれ書かんなどいふ譯に行かんけれども一旦志を決した上は貴兄にも碧梧桐にも

雑誌の件では挫折せん、數年後には學問に於て腦力に於て漸を以て大兄に追附き而して後大兄を乗越すべく期するであらう、いひ悪いことではあるが、大兄百年の後は天晴の大兄の後繼として恥ぢないやうにならう、今迄随分大兄の鞭を受けた、併し小生は可成其の鞭を避けやうとするを常として居た、爾後は喜んで大兄の鞭の下に立たう —略— 小生ももう下宿屋住居でない、女房がある、子がある、最もよく小生を知つて下さるのは大兄だ、しかも小生の大兄に於ける人望ももう蜻蛉の首ほどの昨今だ、小生も發奮すべき時が來たといふべしだ、—略—

小生はたやすく決心して中々實行しなかつた、それは過去だ、小生の生涯に於て猿に食はすべき過去だ、白紙は新たらしき歴史の頁を綴つた、今度の決心も人より見れば或は輕々かも知れぬ、併し小生自身に取れば一生浮沈の分け目だと思つてゐる、實は小生一人でもやらうと思つて居たのだ、大兄が刑場に引かるゝ心持でやつてやらうとの言を聞いて感激の情に堪へぬのである、—略—

明治三十一年七月八日夜 高濱 清

正岡 常規 様

ほと、ぎす發行處を東京へ遷す事 瀨祭書屋主人

ほと、ぎすは初め純平たる地方的臭味を以て起りし者、しかも其形勢の變化を見ては之に適應せんと欲し全國新俳

句の唯一の機關たるに負かざらんことを期せり。然れども松山の地たる海南の一隅に僻在して運輸交通の便大だ善からず。殊に全國各地よりの投書を松山に束ねて之を東京に輸し更に又東京より之を松山に輸すが如きは徒に其勞を増して而して發行遲延の結果あるのみ。要するに松山は種々の點に於て全國の機關たる一雜誌を發行するに適せず。是に於て第二十號の發兌と共に松山の發行所を閉じて新に之を東京に移し、此際を以て大に紙數を増し體裁を改め、今迄の如く俳論、俳評、俳句等を載するは勿論、其外廣く俳文、和歌、新體詩、及び美術文學の批評をも加へて東都の文壇に一生涯を開かんとす。余はほと、ぎすが此改革の機會に遭遇したることを思ひ、諸君に向ひて其改革の始末を報告するに至りしを思へばうた、手の舞、足の踏を覚えざる者あり。

凡そ天下の事、規模を大にすれば勞力を増さざるべからず、成功を得んとすれば責任を負はざるべからず。況んや今迄僻地に栖息して僅に命脈を繋ぎたる黄口の児輩が俄に東都の競争場裏に立ちて俗塵紛々の中に克く獨立獨行し飽く迄正道を取つて天下の標準とならんとするに至りては其企畫壯快を喜ぶと共に中心暗に一片の杞憂を抱かずんばあらず。甲の地方に失敗したる者は乙の地方に成功するを得べし。乙の地方に失敗したる者は丙の地方に成功するを得べし。一たび中央の地（東京）於て失敗したる者は復何の

地方に於て又之を憂ふる者なり。

ほと、ぎすの規模は大にせざるべからず、ほと、ぎすは新俳句の機關として成功せざるべからず、ほと、ぎすは今後生存競争の渦中に立たざるべからず、而して吾人は此のほと、ぎすを編輯し維持し扶掖し擴張せざるべからず。余一身を以て胃へば、病餘の癯軀、立つ能はず、行く能はず、一日の安をも得る能はざる境涯に在りて、間を窺ふて書き、苦を忍んで書き、褥に伏して書き、夜を徹して書く。一部の地方的雜誌ほと、ぎすを書くにすら苦辛いふべからざる者あり。今より後中央的雜誌ほと、ぎすを書くべきを思へば余はそ、ろ刑場に引かるゝの感無きにあらず。然り余はほと、ぎすと終始せんと欲する者なり。余死すとも固よりほと、ぎすは死せざるべし、しかもほと、ぎす死するの日は即ち是れ余の死するの日ならざるべからず。ほと、ぎすは余の生命なり。——略——

終りに臨んで此ほと、ぎすの發起人は柳原極堂氏なることを諸君に告げ、且つ多忙の身を以て常に編輯其他の勞を取られたる事を極堂氏に謝せんと欲す。發行所の移轉と共に編輯の任亦極堂氏の手を離れて虚子氏の手に移るといへどもほと、ぎすの名存する限りは極堂氏の名は永く忘らるゝことなかるべし、況んや今日以後といへども力をほと、ぎすに盡すこと多かるべきをや。

ほと、ぎす第二十號 明治卅一年八月卅一日發行

購讀者諸君に告ぐ ほと、ぎす第二十號

極堂

吾が「ほと、ぎす」は明治三十年一月を以て生れ、號を重ねること既に二十。始めは地方後進を導く目的を以て中央先輩の助力の下に極堂専ら其の編輯に従事したりしが、我が新派俳句の勢力は日に増し月に加はり、曩きには伊豫一國に限られたりし讀者今は却て伊豫以外の地を占むること多きに至る。是れ吾が「ほと、ぎす」の地方的なるを脱して漸く正に中央的ならんとするもの。獨り伊豫一地方の後進の爲めに奮勵一番すべきの時なるを知る。乃ち次號第二十一號を以て一大改良を企て天下俳友の希望に副はんとを欲す。

ホトトギス第四卷第一號のはじめに

子規

ホトトギスは四年程前に伊豫の松山に生れたので、其時は極堂一人の力で成り立つて居たのである。明治廿九年の節季に極堂が上京して、草廬の例會に出て來て、始めて俳諧雜誌を出すことを話したので我々も驚いた位であつた。極堂がいふには、雜誌を出すにつけても金の事は僕一人で引き受ける、少しも他人を煩さぬ、雜誌の名前に就いてもいろ／＼諸君の御意見もあらうが、僕は独斷でホトトギスと極めてしまつた、只原稿の事だけは一切諸君の供給を仰

ぐ積りだが引き受けてくれまいか、といふやうな無造作な話なので、満座の人も直ちに原稿の供給を承諾した。翌年の始から毎月一回薄へらな雜誌は發行せられたが賣高は大抵三四百部の間にあつたさうだ。それも代金は容易に集まらるので收支相償ふといふ事はむつかしかつたと聞いて居る。しかしとにかく一年間は續いた。其頃極堂は手紙をおこして、俗務が忙しいからホトトギスをやめる、といふて來た。これには自分はひどく當惑した。もつとも極堂は政黨にも新聞にも關係して忙しい身でありながら今迄ホトトギスの原稿を整理して校正から會計から發送から何も彼も一人でやつて居るのは非常の熱心でなければ出來ぬ事であるのに、剩へ我々の引き受たる原稿の供給はとかく後れがちになるといふ次第であるから、極堂のやめると言ひ出したのは無理はない。併し自分はひどく當惑した。其故は自分か今迄關係した事業は二つもあつたが二つとも倒れてしまふたので、今更第三の事業といふべきホトトギスを倒したくないのである。其二つの事業といふのは、第一は「俳諧」といふ俳諧雜誌であつて、これは明治廿六年にある本屋の發起で始めて自分は其一部分を擔當したが二號で潰れてしまふた。第二は「小日本」といふ新聞で、明治廿七年の紀元節に第一號を出したが日清戦争の影響で同じ年の七月十五日に潔く寂滅してしまふた。此等は皆自分で思ひついで發起したのでは無いがいづれも初めから關係して居た

のには違ひ無い。自分は事業を起す事には極めて小膽である上に、若し自分で一度發起した事業は死ぬる迄やめぬといふ決心であるから容易に自分で新聞や雑誌を起すといふ事はせぬのである。けれども自分が發起せぬにしても自分が關係した以上は責任を逃れる譯には行かぬ。「俳諧」と「小日本」は既に倒れて今又ホトトギスが倒れては自分はいかにも意氣地無い人間となつてしまふのである。それ故ホトトギスだけはどうかして永續させたいと思ふて、自分はその旨を極堂に告げて、若し出来るなら今少し續けてやつてくれぬか、他人を強ひる事は出来ぬが自分の抜いた募集句だけは此後清書して送るやうにしていくらか君の手腕をつぶさせぬやうにするから、と懇に頼んでやつた。極堂は快く引き受けて又續けて發行した。それから半年過ぎた。極堂は再び手紙をおこして。何分にも忙しくて困るが雑誌は東京で引き受けてやらぬか、といふて來た。自分は東京でやるなど、いふ事は思ひもよらんので無談ことわつた。然るに其頃一寸歸國して居た虚子は何か感ずる所があつたか、引き受けてやらうといひ出した。先づ自分に手紙をおこして、一しよにやるか、どうか、といふて來たから、幾度か念を押した末でそれなら一しよにやらう、併し東京へ出してやる以上は自分は命がけでやるのだ、といふてやつた。此時東京でやるといふ事をあやぶんだのは自分ばかりで無い。多くの知人は皆之をあやぶんだ。ホトトギスの愛

讀者三百人も大方はあやぶんだらしかつた。ところが東京へ出てやつてみると存外好都合で、今日迄の處は著々と歩を進めて来ていよ／＼第四卷第一號を發兌するといふ運びになつた。我々の嬉しさはいふ迄も無い事で、赤飯に大根の膾で氏神を祝ひたい程であるが、まだ／＼そんな時機では無い、仕事はこれから始まるのだ。——略——

おわりに

「創業と守成と孰れか難き」を引き合に出すまでもない。明治三十年一月十五日松山で創刊された「ほと、ぎす」が平成の現代も東京千代田区で合資会社ホトトギス社として生き続けている。その裏には極堂の、虚子の、そして正岡子規の「生命」と觀じた「ほと、ぎす」への強固な思いがあつたことを確認することが出来た。このことが何よりの収穫であつた。ありがとうございました。

(平成三十年六月例会講演 常任理事)

子規と俳句作法

平岡 英

(一)

先づ子規の句をご覧いただきたい。

漱石が来て虚子が来て大三十日 明治二十八年

この句が「病余漫吟」では次のようになっている。

虚子が来て漱石が来て大晦日

(子規全集第二十一卷「草稿ノート」)

次にこの句をご覧いただきたい。

漱石来るべき約あり

梅活けて君待つ庵の大三十日

とあるように漱石が来ることを子規は分かっていた。

明治二十八年は子規にとって多事多難の年である。従軍記者志願、遼東半島へ渡る。帰国の船中で大咯血、神戸・須磨療養、漱石の愚陀仏庵滞在。

十二月六日に道灌山で虚子に後継者になることを断られる。

「命脈は全くここに絶えたり 虚子は小生の相続者にもあらず」この時の様子は十二月十日頃の子規の飄亭あての書簡で分るが、それは後のことである。飄亭はすぐには口外していない。二十八年末の漱石は、道灌山事件について何も知らない状態である。

虚子は子規と音信を断っていたわけではないが、この年末に根岸を訪ねる気持ちにはなっていなかった。ただ漱石に誘われたので随行している。子規はまさか虚子が現れるとは思っていなかった。「病余漫吟」の句となつた。子規は内心、虚子が来たことが嬉しかったのであろう。漱石にとっては、子規周辺の中では虚子が心の許せる人であつた。

年が明けて明治二十九年一月三日の午後「発句始」が根岸の子規庵で開かれた。会者は松山組の六人(鳴雪、飄亭、漱石、虚子、可全、碧梧桐)に鷗外、漱石、そして催主の子規である。鷗外は金州で子規と親しく語り合った縁である。当時軍医学校長の鷗外が句会に顔を出すのは珍しい。

鷗外は第二回の運座から批評に加わり。第三回の運座より出句している。

第三回運座の出句の一部である。下の括弧は採用した人を表す。誰の句を採ったかにも意味がある。

吶喊の又もや起る霰かな 飄亭 (鳴外)

* 吶喊は「突撃」などの大声である。戦地を経験している
鳴外だけの採った句である。

おもひきつて出で立つ門の霰哉 鳴外 (鳴碧)

* 上五の「思い切つて」で勢いをつけ、あとの七五でも緊
張感を持続している。

井戸端の鍋も盥も霰哉 鳴雪 (規可虚飄)

雪洞に千鳥聞く須磨の内裏哉 子規 (鷗飄虚)

冬川に道のついたる鳥居哉 虚子 (漱碧可)

水かれて轍のあとや冬の川 漱石 (碧飄)

冬川の家鴨よごれてつどひけり 碧梧桐 (規鳴虚)

霰降る片側町の長屋かな 可全 (漱碧)

(子規全集第十五卷「俳句会稿」)

(二)

明治二十九年になると虚子は長兄の政忠の病氣見舞いの
ため松山へ帰っていた。

当時の池内家は、虚子がいたところと同じ玉川町であった。

子規上京後、愚陀仏庵に一人でいた漱石は、「高濱君」と
声をかけ、二人で道後温泉へも行っている。

同年四月に漱石は松山を離れ、熊本の第五高等学校へ赴
任することになる。

三津浜からの広島行の客船に、虚子も同乗している。上

すめる。

同年末に書いたのが、「猫」である。虚子がタイトルを決
め体裁を整えて、明治三十八年の「ホトトギス」一月号に
載せて好評を得る。虚子の配慮がなければ文豪の誕生はど
のように変わったか分からない。継続していた漱石と虚子
の間柄があつたことである。

(三)

* 頼祭書屋俳話 明治二十五年六月～十月

「日本」連載

* 芭蕉雑談 明治二十六年十一月～二十七年一月

「日本」連載

* 俳諧大要 明治二十八年十月～三十回

「日本」連載

* 俳人蕪村 明治三十年～三十一年「日本」

以上のように子規は多くの俳論を発表してきたが、具体
的に俳句の作り方について述べることは少ない。

その中で、明治二十八年夏に愚陀仏庵で執筆したといわ
れる「俳諧大要」の修学第一期が、初心者向けにわかりや
すい。

* 思ふまをものすべし巧みを求める勿れ

* 思ひ立ちし其瞬間に半句にてもものし置くべし

等の客室は漱石と虚子の二人だけであった。

漱石は七才下の虚子の思いと、その抱負を聞いた。

広島から漱石は西の熊本へ向かい、虚子は東へ上京する。

二十九年六月六日付の漱石から子規宛の書簡がある。

「虚子の事にてご心配の趣御尤に存候。先日虚子よりも大
兄との談判の様相相報じ来り申候」

たまたま道灌山事件について、半年を経て子規、虚子の
両者から漱石へ報告をしているのである。

「色々の事情もあるべくけれど先ず堪忍して今迄の如く
御交際あり度と希望す」

「虚子が前途のためなるは無論なれど同人の人物が大い
に松山のならぬ淡泊なる処、のんきななる処、気のきかぬ処、
無気様になる点に有之候。・・大兄の観察点は如何なるか
しらぬ度先ず普通の人間よりは好き方なるべく左すれば左
程愛想づかしをなさるにも及ぶまじか。」

子規周辺の中で漱石が虚子に好意を持っていることがよ
く表れている。

このあと八年後の明治三十七年ことである。

英国から帰国した漱石は帝国大学と一高で教鞭をとって
いたが、ロンドンに続いて再度の神経衰弱になる。虚子は
漱石の妻鏡子の依頼もあり、気晴らしに寄席や芝居などに
連れ出し、その中で「ほととぎす」に文章を書くことをす

* その時候の景物を詠ずること連想が早く感情が深くし
てもものし易し

* 月並み風に学ぶ人は多く初めより巧者を求め婉曲を主
とす 初心の句は独活の原木の如きを貴ぶ。

「俳諧大要」第五 修学第一期

虚子は子規の「俳諧大要」と同じ時期に「日本人」に「俳
話」を連載する。

* 平明の句には連想を呼び易く、晦渋の句には連想を呼
びにくい。

* 単純の句には連想を伴ひ易く、複雑の句には連想を伴
ひにくい。

* 文学は凡て余韻を生命とする。多く解し味ひ悟り、而
して少なく言ふの謂ひ。

虚子のはちに「ほととぎす」の中で「俳句の作りやう」
など俳句の作りかたについては何度も言及している。

(四)

子規の「俳句革新」は明治三十年に出来上がったとの見
方がある。

「明治三十年は、子規の俳句革新の仕事が一応の達成を見
た時期とされる。」

子規全集第五卷俳論俳話二「解題」 浅原勝

「子規における俳句に就いての基本的な主張と理論構造は、ほぼ明治三十年頃までに提示された」とみられる。」

同第四卷俳論俳話一「解説」久保田正文
子規全集の解題と解説の間でも若干の意見の差があるようである。

次の資料から見ると、子規の俳論が一わたり発表されたが、必ずしも俳句革新が達成されたとは言えない。

*都新聞が募集した「俳諧十傑」(明治三十一年三月五日)の一覧である。一位 老鼠堂永機34461票(4位 三森幹雄) 15位まで旧派が並び16位角田竹冷、28位大野酒竹、36位尾崎紅葉、37位正岡子規1053票。
以下略。

*博文館発行の雑誌「太陽」の募集した「俳諧十二傑」(明治三十二年) 六月十五日臨時増刊。

旧派六人、老鼠堂永機、三森幹雄ほか。

新派六人、角田竹冷、大野酒竹(以上秋声会)、尾崎紅葉、巖谷小波(以上むらさき吟社) 正岡子規、内藤鳴雪(日本派)。

以上のように明治の新派の各派の中で最大の俳句結社は、子規の日本派ではなく、尾崎紅葉の「むらさき吟社」に始まる「秋声会」であった。

(五)

江戸時代中期に、蕪村と同時代の天明を中心にして活躍した俳人に大島蓼太(りょうた)がいる。子規は蓼太を縦横奔放、博学精通と評し、蓼太句集をよく手にした。従来の俳論が以心伝心を言い、難解で曖昧であったのを蓼太は素人にも理解できるようにした。初学者の必須の参考書として「俳諧発句小鑑」がある。

一、発句案じ方の事 句は云い尽すまじきもの 上手の詩歌は言外に風情を備ふ。

二、趣向をとる事 具体的な作品の組み立て方の工夫を「趣向」という。

三、句に理屈をぬく事 理屈を抜きて自然の風姿にうつす「死活の句法」という。

この「俳諧発句小鑑」については、明治の新派の俳人も目を通したことと思われる。

(平成三十年五月例会卓話 本会相談役)

(以下略)

「会員随想」

外国の方に俳句や短歌で日本を伝えたい

越智泰子

もともと「ことば」のことには、深い関心を持っていないかった私ですが、ふとしたことがきっかけで、振り返れば三十年くらいも子規さんのことに関係させていただいていたことになる。

そもそもは、先にも述べましたように、「ことば」のことが好きで、同志社大学の時代にも、京都を背景とする古典(古代後期)の文学をたくさん読み、お寺などいろいろなおたずねしたことを思い出す。その他に、自分の中に、そっと燃えていた向学(関心)の一つに国際的な感覚を学ぶことが加わる。このことは、叔母の影響があるように思う。時々会う叔母だったけれど、何か中に深い深いものを持っているように思えた。それも、決して、自分本位な希望ではなく、中に脈々と国際性を学びたいという希望を秘めた叔母だったと思う。その叔母は、スペインで学んだ期間が長く、皆様にかわいがって頂いたが、結婚はしなかった。音楽のことに羽ばたいた叔母だが、その底に深く深く国際性、神様への信頼をもち、本当に女性らしい熱い思いを秘めている。

た叔母だったと思う。底に深く強く国際性を持っていたから、あれだけの学びが出来たのだと思う。

それに比べ、私には、何が残せるだろうか？ 悲しくなってしまう。

でも、今からでも出来ることもあるかも知れない！ 日本を愛し、外国の方に日本を伝えること……。そんな思いが、私を、こんなにも(三十年も)俳句から離れさせなかったのかもしれない。今からかなり前になるが、神田惣介さんという同志社大学の先輩のお力で、カリフォルニア大学の国際俳句の会に参加したことは忘れられない思い出である。自分の英語がカリフォルニア大学でも通じた感動！

美しい日本語、日本らしいマナー、四季のある日本を愛してくださっている方々が沢山いる。その感動は、忘れられない。ちょっと遅くなったと思うが、その感動を、これからは俳句や短歌に詠んでゆきたいと思う。今日も、前を向いて、生きることを捨てないで、祈りながら……。

それと最後にひとつ加えらしたら、子どもたちの俳句に親しむ心を育てることのお役に少しでも立てばうれしいと思う。

子規様の御霊安らかにとお祈り致しながら……。

Getting closer
the Matsuyama castle
by the cold moon

(M. Rosa. ペンネーム)

(日本英語検定協会賞 受賞句)

塾終えし 銀輪の帰路 星涼し

越智泰子

(第49回正岡子規顕彰秋季全国俳句大会特選 受賞句)

【子規の歌碑】

足なへの 病いゆとふ伊豫の湯に

飛びても行かな 驚にあらませば

子規



道後公園子規歌碑
(子規記念博物館前)

【速報】 西龍寺に子規句碑建立

九月二十日、松山市持田町の佛海山西龍寺に於いて子規句碑の除幕式が行われた。児島一晴住職の読経の後正岡明氏、鳥谷照雄会長、竹田美喜館長他来賓の方々によって伊予の青石の句碑が除幕された。

百二十三年前の明治二十八年九月二十日、子規は極堂を伴って石手寺方面を散策し、帰途西龍寺の門前を歩き「鶏頭の丈を揃へたる土塀哉」の句を詠む。鶏頭の花も植えられた句碑は、当日の雨にその青さを増して見事であった。



除幕



本堂南側に建立された子規句碑

【速報】

愛媛銀行本店で「子規の故郷松山」写真展開催中

松山市勝山町二丁目一番地の愛媛銀行本店ロビーに「子規の故郷松山」と題して、子規事典掲載の写真や俳句、短歌をパネル展示、子規会叢書や子規会誌も合わせて展示した。子規の生きた明治松山の風景を通して、子規の故郷松山への思いが来場の方々に伝わってくる内容である。会期は十月三十一日まで。愛媛銀行では引き続き各支店に於いて同企画を展開する予定。(入場無料)

主催 松山子規会
協力 愛媛銀行



愛媛銀行本店ロビーの展示風景

【速報】

松山子規会元会員 故高橋俊夫氏お別れの会

平成三十年九月十一日(火)午後二時から松山市本町五丁目四の大宝寺で行われ、本会からは鳥谷照雄会長を初め十数名が出席した。

住職の読経のなか各出席者が焼香した後、極堂会近藤元規副会長、松山子規会鳥谷照雄会長、友人代表の鳥川允子氏(同級生)がそれぞれ弔辞を述べられた。続いて、出席者全員による自己紹介と高橋俊夫氏の思い出が語られ、同寺墓地の墓にお参りをして解散となった。



住職による読経



近藤元規極堂会副会長の弔辞

第一一七回子規忌 献詠作品

事務局

〔俳句〕

糸瓜忌や未だ敬慕の濃く深く
松山市 中矢えり子

夕焼けに歓声の拍手ホームラン
松山市 沼田 淳子

伸び切った夏草夏至過ぎ子規忌近し
松山市 松垣寿比古

坊ちゃん球場にノボール熱い雲の峰
春日部市 田中 正隆

蝉鳴かぬいや鳴けぬ被災地胸痛む
四国中央市 加藤 敏史

いかる啼く刈田の子規や塔の鐘
伊予市 宇都宮鬼杞

松山に住んで良かった瀬祭忌
松山市 玉井 恭介

子規居士にまづまゐらせて月の酒
松山市 黒田 耕風

砥部焼の花瓶乳色瀬祭忌
西予市 乾 燕子

足重し夏雲眩しヤマボウシ
松山市 仙波 光彰

糸瓜忌や平成最後の献句する
松山市 戸田 政和

深め合ふ絆九月の子規とあり
東京都 今井田敬子

妹愛でし額紫陽花の白匂う
松山市 森 慎吾

バスの道朝霧の中子規しのぶ
松山市 越智 泰子

子規のごと花野いつくしみつ歩く
松山市 田村 七重

七夕や子供俳句吊る子規の街
松山市 西原ちづ子

南無糸瓜佛即ち子規の生命なり
松山市 三好 恭治

糸瓜忌や昨年おりし人はなく
松山市 戸嶋 健二

九月来るのぼさんはいま松山に
松山市 平岡 英

矛おさめ海に落ちゆく夏陽かな

宇和島市 港 権平

この猛暑へちまの水は涸れざるや

松山市 高村 昌慶

子規慕い事典繙く瀬祭忌

松山市 高木 貞雄

三の糸替えて爪弾く子規忌哉

松山市 福井みどり

小竹の風猫と仮寝や糸瓜の忌

松山市 森岡美枝子

愚陀仏は柿の木もあり子規の宿

松山市 松浦 卷夫

百年なお続く発掘子規作品

松山市 乃万美奈子

微醺かな子規事典めくる夜の秋

松山市 島川 允子

糸瓜忌に指折り数え父しのぶ

松山市 神山 充雅

世辞もなくへつらいもなく去年今年

松山市 井手 康夫

水着あと孫の成長えみこぼれ

松山市 両門 義幸

従軍の子規の刀や秋深し

松山市 武内 哲志

平成の最後となりし子規忌かな

松山市 浅海 好美

〔会員以外の方の献句〕

子規の日を過ぎて芒の日々ありぬ

松山市 夏井いつき

〔漢詩〕漢詩

第一百十七回子規忌書感

松山市 寫川 武彦

慕来俳聖會伽藍

俳聖を慕い来りて伽藍に会し

忌祭門人情愛潭

忌祭の門人情愛潭し

朗朗清吟聲切切

朗々たる清吟声切々

馳懐千里子規庵

懐いを千里子規庵に馳す

〔短歌〕

ベースボール「野球」と名付けし球遊士

名古屋市 竹内 通夫

地獄で野球と閻魔も舌巻く

子規居士の辞世の三句は糸瓜への

感謝の言葉と吾は解しぬ

四国中央市 加藤 敏史

天地に静謐願ふ人々の

声聞けよかし居士の糸瓜忌

東京都 福田 安典

幾度も子規が描きて楽しみし

秋海棠今朝わが庭に咲く

四国中央市 山上茂次郎

子規庵に歌会叶ひて九つの

茶碗が机に並べられたり

東京都 小山 照子

八重さんののぼさんのぼさん呼ぶ声が

吾を呼ぶ妣の声に重なる

松山市 島川 允子

秋海棠我小園に咲きし色

嬉し嬉しの子規まで届け

松山市 鳥谷 照雄

糸瓜忌や誠織りなす道標

尊き歩み絆の強さ

松山市 武田 峰松

子規に和歌教えし正雄の年超えて

吾は八十八白寿を迎えん

松山市 井手 康夫

【会員研究短信】

「発句経譬喩品」の成立年判明

今村 威

「発句経譬喩品」は、子規が身近な俳人二六人を、八百屋の店先に並ぶ野菜や果物に喩えたユーモラスな人物批評である。短冊一枚に一人ずつ書かれている。従来成立年について諸説あり、私は、碧梧桐を「つくねいも」にたとえて、「見事ニクツ、キアフタリ 今少シハナレタル処モホシ」と記しているのを、碧梧桐の新婚当時に多少のねたましさを込めて評したものと見て、明治三三年末頃の成立と推定していた。ところが、二〇一八年九月二三日付け「愛媛新聞」の「道標」で、復本一郎氏が、子規庵保存会に寄託された子規の新資料「丁酉遺珠（ていゆういしゆ）」（丁酉は明治三〇年の冒頭に書かれた虚子の句「われは薯にして

発句経譬喩品の春」から、次のように断じられた。子規が明治三〇年一月の一〜三日に作っていた「発句経譬喩品」を、一月四日の子規庵年賀に、訪問一番乗りした虚子に見せ、「虚子君 さつまいも 甘み十分ナリ 屁を慎ムベシ」とあるのを見て、虚子が詠んだのが、前述の句であると。つまり、「発句経譬喩品」は、明治三〇年正月の成立と判明したのであるが、それでは碧梧桐と「見事ニクツ、キアフ」ていたのは誰か。それは虚子であると、復本氏は述べておられる。
(本会相談役)

【訂正】

一五九号二二頁下段八行目〜九行目「先ず祖父義任医師」とあるのは、「先ず曾祖父義任医師」の誤りです。お詫びして訂正します。

【短信】

○新入会員のご紹介

・田中 正隆様 春日部市

・両門 義幸様 松山市

・曾我 忍様 松山市

ご入会いただき有難うございます。これからの会員としてのご活躍をご期待申し上げます。



子規の故郷松山（道後温泉湯之町入口）

〈松山子規会は次の皆様に賛助会員としてご支援いただいております〉

(敬称略・順不同)

・伊予鉄道株式会社	〒790-0012 松山市湊町4丁目4-1	TEL089-948-3222
・株式会社伊予銀行	〒790-8514 松山市南堀端町一番地	TEL089-941-1141
・株式会社愛媛銀行	〒790-0878 松山市勝山町2丁目1	TEL089-933-1111
・愛媛信用金庫	〒790-0002 松山市二番町4丁目2-11	TEL089-946-1205
・生活協同組合コープえひめ	〒790-8543 松山市朝生田町3丁目1-12	TEL089-931-5201
・四国電力株式会社	〒790-8540 松山市湊町6丁目6-2	TEL089-946-9706
・三浦工業株式会社	〒799-2696 松山市堀江町7番地	TEL089-979-7013
・有限会社星川興産	〒799-0111 四国中央市金生町下分429	TEL0896-58-2116
・学校法人河原学園	〒790-0001 松山市一番町1丁目1-1	TEL089-943-5333
・株式会社サンメディカル	〒798-0013 宇和島市御幸町1丁目2-13	TEL0895-25-2880
・えひめ洋紙株式会社	〒791-8036 松山市高岡町455-1	TEL089-973-9200
・医療法人聖光会鷹の子病院	〒790-0925 松山市鷹子町525-1	TEL089-976-5551
・長谷川歯科医院	〒791-8022 松山市美沢2丁目6-23	TEL089-925-7600
・久米病院	〒790-0924 松山市南久米町723	TEL089-975-0503
・南海プリント株式会社	〒790-0051 松山市生石町449-3	TEL089-943-0770
・有限会社日新商会	〒791-8044 松山市西垣生町802-12	TEL089-971-6633
・株式会社時の名所 ふなや	〒790-0842 松山市道後湯之町1-33	TEL089-947-0278
・大和屋本店	〒790-0842 松山市道後湯之町20-8	TEL089-935-8880
・株式会社四国道後館	〒790-0841 松山市道後多幸町7-26	TEL089-941-7777
・不二印刷株式会社	〒790-0054 松山市空港通2丁目13-10	TEL089-973-1266
・巴製菓株式会社	〒790-0842 松山市道後湯之町13-7	TEL089-941-3452
・紀の国屋食堂	〒790-0012 松山市湊町5丁目3-5	TEL089-945-1309
・癸丑吟社	〒790-0923 松山市北久米町1161-1	TEL089-976-6432
・古書 猛牛堂	〒790-0854 松山市岩崎町2-6-34	TEL089-948-8137
・豊島内科	〒790-0844 松山市道後一万3-7	TEL089-924-2936

(平成30年9月末日現在)

【編集後記】

本号は、平成三十年五月及び六月例会での講演、卓話並びに第一一七回子規忌を中心に構成いたしました。原稿をお寄せいただいた方々には、ご多用の中ご協力をいただき、厚くお礼を申し上げます。さて渡部平人副会長が長らく本誌編集長を務めてこられました。本号から松浦巻夫、佐伯健の両名が編集の任に当たることになりました。

今村威相談役、渡部副会長と引き継がれた本誌編集の責任の重さに戸惑うばかりですが、子規研究誌の伝統を継承しながら、開かれた子規会として外部の方々も含めた、多様な研究の成果を掲載したいと考えています。

会員の皆様と共に会誌を作り上げて参りたいと思いますので、ご協力、ご指導の程をよろしくお願い致します。

(文責・佐伯 健)

子規会誌 第一六〇号

(会誌季刊 四、七、十、一月)

発行日 平成三十年十月十九日

発行 松山子規会・会長 鳥谷照雄

編集 松山子規会・松浦巻夫、佐伯 健

印刷所 不二印刷株式会社

電話 〇八九一九七三二二六六

子規会誌希望・入会等連絡先

松山子規会事務局 高川武彦

〒七九〇〇九二三

松山市北久米町二六一一

電話 〇八九一九七六八六四三三

郵便振替 〇一六二〇一七一八六八

(定価・四一〇円)

©松山子規会